言語学大辞典

The Sanseido Encyclopaedia of Linguistics

第5巻

【補遺・言語名索引編】

亀井孝・河野六郎・千野栄一[編著]

三省堂

The Sanseido Encyclopaedia of Linguistics

Volume 5

Supplement & Index

Editors

TAKASHI KAMEI

ROKURŌ KŌNO

EIICHI CHINO

東京外国語大学
94794
13. 11 13
言語文化研究所蔵書

© Copyright 1993 by Sanseido Co., Ltd.

First Published 1993

Made and Printed in JAPAN at the Sanseido Press, TOKYO

それぞれの項目がどこで用いられる形であるかが記されている.

[参考文献]

Boas, Franz (1911), "Tsimshian", in F. Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages* 1 (Bulletin of the Bureau of American Ethnology, Vol. 40, Pt. 1, Washington, D. C.)

——— (1912), "Tsimshian Texts", *Publications of the American Ethnological Society*, Vol. 3 (Leyden)

Bright, William (ed.) (1992), "Penutian Languages", *International Encyclopedia of Linguistics*, Vol. 3 (Oxford University Press, London)

Dunn, John A. (1979a), "Tsimshian Internal Relations Reconsidered : Southern Tsimshian", in B. S. Efrat (ed.), *The Victoria Conference on Northwestern Languages* (British Columbia Provincial Museum Heritage Record, No. 4, Victoria)

——— (1979b), *A Reference Grammar for the Coast Tsimshian Language* (Canadian Ethnology Service Paper, No. 55, National Museums of Canada, Ottawa)

——— (1979c), "Tsimshian Connectives", *International Journal of American Linguistics* 45(2)

Hoijer, Harry (1946), "Introduction", in H. Hoijer et al., *Linguistic Structures of Native America* (Viking Fund Publication in Anthropology, No. 6, Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, New York)

Krauss, Michael E. and Mary Jane McGary (1980), *Alaska Native Languages : A Bibliographical Catalogue*, Part 1 : *Indian Languages* (Alaska Native Language Center Research Papers, No. 3, University of Alaska, Fairbanks)

Rigsby, Bruce (1967), "Tsimshian Comparative Vocabularies with Notes on Nass-Gitksan Systematic Phonology" (MS., Albuquerque)

Sapir, Edward (1916), *Time Perspective in Aboriginal American Culture, A Study in Method* (Canada Department of Mines, Geological Survey, Memoir 90, Anthropological Series 13, Government Printing Bureau, Ottawa)

Susman, Amelia (1940), "Tsimshian Materials", (MS., American Philosophical Society, Philadelphia)

Suttles, Wayne (vol. ed.) (1990), *Handbook of North American Indians*, Vol. 7 : *Northwest Coast* (Smithsonian Institution, Washington, D.C.)

なお，ツィムシアン語に関するこれまでの資料については，クラウスとマガリー (Krauss and McGary, 1980)に詳細な記載がある.

[参　照]　ツィムシアン語，北米インディアン諸語

(笹間　史子)

カカオペラ語　英，西 Cacaopera

カカオペラ語は，中米，エルサルバドルのモラサン (Morazan) 県のカカオペラ (Cacaopera) やリスリケ (Lislique) で話されていた，ミスマルパ語族に属する言語である.

1929 年の時点では，カカオペラやリスリケで，老人たちによって話されていたが，1974 年には，わずかに単語や句を記憶している人が見つかっただけで，死語となった.

[参考文献]

Campbell, Lyle (1975), "Cacaopera", *Anthropological Linguistics* 17(4) (Indiana University, Bloomington)

Comzemius, Eduard (1929), "Notes on the Miskito and Sumu Languages of Eastern Nicaragua and Honduras", *International Journal of American Linguistics* 5

Lehmann, Walter (1920), *Zentral-Amerika* (Dietrich Reimer, Berlin)

[参　照]　ミスマルパ小語族，中米インディアン諸語

(八杉　佳穂)

カッシート語　英 Kassite, 独 Kassitisch, 仏 cassite

[概　説]　古代メソポタミアにおいて，バビロン第 1 王朝 (別称ハンムラビ王朝) の後を受け，若干の中断をはさみながら，紀元前 1475 年から 1155 年まで 320 年にわたって，バビロニアにおける最長の王朝を樹立したカッシート人の言語. 現在までのところ，系統は不明である.

カッシート時代に，カッシート人が常に支配層にいたこと，カッシート人の特権階級が常に存在したこと，カッシート人が圧倒的に多い人口比率を占めていたこと，などを示す証拠は，まったく残っていない.

カッシート時代には，シュメール語による創作活動が盛んになり，この時代のニップール (現名 Niffer,

Nuffer) やウル (Ur) の遺跡からは，厖大な量の粘土板が出土しているが，国王銘辞の多くは，シュメール語によって記録され，カッシート語のみで書かれた記録はまったく存在しない．現段階でのカッシート語に関する知識は，アッカド語訳を付記したカッシート人名のリストと，次にあげるカッシート語・アッカド語対訳の語彙集から，間接的にうかがえるのみである．

[カッシート語・アッカド語対訳語彙集]　この語彙集は，奥書によって，48項目からなることが明らかであるが，最初の2行以外は，完全に残存している．左欄がカッシート語，右欄がそのアッカド語訳である．アッカド語欄の d は，シュメール語 dingir「神」の省略表記で，神名の前におかれる決定詞である．〔 〕，「 」は，欠損を，< > は，補足を示す．

<表　面>

1) 〔ḫa-ar-bu〕	〔^{d}a-num〕	「(天神)アヌ」
2) 〔　　〕	$^{(d)}$「en-」〔líl〕	「(シュメールの最高神)エンリル」
3) ši-〔ḫ〕u	^{d}sin	「(月神)シン」
4) sa-aḫ	^{d}šamaš	「(太陽神)シャマシュ」
5) šu-ri-áš	^{d}šamaš	「(太陽神)シャマシュ」
6) ub-ri-ya-áš	^{d}adad	「(雷雨神)アダッド」
7) ḫu-ud-ḫa	^{d}adad	「(雷雨神)アダッド」
8) ma-rat-taš	^{d}ninurta	「ニヌルタ神」
9) gi-dar	^{d}ninurta	「ニヌルタ神」
10) ḫa-la	^{d}gula	「グラ女神」
11) ka-mul-la	^{d}é-a	「エア神」
12) šu-ga-ab	^{d}nergal	「ネルガル神」
13) šu-ga-mu-na	^{d}nergal ^{d}nusku	「ネルガル神，ヌスク神」
14) dur	^{d}nergal	「ネルガル神」
15) šu-gur-ra	^{d}šú-mál-ya	「シュマルヤ女神」
16) mi-ri-zi-ir	^{d}gašan	「女神」
17) ma-áš-ḫu	i-lu	「(男)神」
18) da-ka-áš	ka-<ak>-ka-bu	「星」
19) da-gi-gi	šamû^{ú}	「天」
20) i-lu-lu	šamû^{ú}	「天」
21) zi-in-bi-na	zina	「？」
22) mi-ri-ya-áš	er-ṣe-tum	「地」
23) tu-ru-uḫ-na	ša-a-ru	「風」
24) ya-an-zi	šar-ru	「王」
25) nu-la	šar-ru	「王」
26) ma-li	a-mi-〔lu〕	「人間」
27) me-li	ar-〔du〕	「(男)奴隷」

<裏　面>

28) ku-uk-la	an-du	「(女)奴隷」
29) áš-lu-lu	pap-pu-ú	「？」
30) na-áš-bu	ni-i-šu	「人民，人々」
31) ma-ar-ḫu	qaq-qa-du	「頭」
32) ḫa-mi-ru	še-e-pu	「足」
33) sa-ri-bu	še-e-pu	「足」
34) ya-šu	ma-a-tum	「国土」
35) áš-rak	mu-du-ú	「知っている」
36) šir	qa-áš-tu	「弓」
37) e-me	a-ṣu-ú	「出る」
38) na-zi	ṣil-lum	「陰」
39) ka-dáš-man	tu-kul-tum	「信頼」
40) ša-ga-rak-ti	nap-ša-ru	「和解する」
41) nim-gi-ra-ab	e-ṭé-rum	「救う，保護する」
42) ú-zi-ib	e-ṭé-rum	「救う，保護する」
43) ḫaš-mar	ka-su-su	「鷹」
44) si-im-bar	li-da-nu	「若者」
45) ša-ri-bu	tu-ul-lu-ú	「？」
46) šim-di	na-da-nu	「与える」
47) ki-〔di〕n	ki-di-nu	「保護を受けている」
48) ni-〔bi〕	kit-tu	「正義」

この語彙集にみられる神名，Ubriyaš, Marattaš, Šuriyaš は，それぞれ，ギリシアのボレアス(βορέας)神，ヴェーダのマルタス(Marutas)神，スールヤ(Sūrya)神と比較され，そのことからインド・ヨーロッパ系民族がカッシート人の軍事的支配階級を形成していたと考えられたことがあるが，仮説の域を出ない．

他の語彙項目は，カッシート人の王名や人名に頻出する要素で，このことから，この語彙集の作成意図が，日常ひんぱんに用いられる人名や固有名詞の理解にあったことが窺知される．たとえば，有名な kadašman-^{d}en-líl 王は，「エンリルを信頼する(者)」と理解される．他の人名リストでは，やはり有名なバビロンの王，Kurigalzu が Ku-ur-gal-zu として，「カッシート人の牧者」と説明されている．

以上の限定された資料に基づいて，音素体系はともかく，文法体系を復元することは，現段階では望めない．

[参考文献]

Kemal Balkan (1954, 1978²), *Kassitenstudien 1: Die Sprache der Kassiten* (Aus dem Türkischen übersetzt von Fr. R. Kraus) (American Oriental Society, New Haven)

[参　照]　シュメール語，アッカド語

(吉川　守)

カナウル語　ヒンディー，英 Kanaur, Kănaur, Kă-

nāwăr, Kanor, Koonawur, Kunáwar, Kunawar, Kanâar, (*LSI*) Kanawar; Kanauri, Kănaurī, (*LSI*) Kanāwᵃrī; Kanâwari, Kunawaree

[名　称]　言語名の自称は，Kănōriṅ, Kanoring; Knorin, Kănōriṅ Skad', Kănōrĕanŭ Skad', Kanoreanu Skad, Kanoring Skadd である．

現在，インドでは，一般に，ヒンディー語とカナウル語で，それぞれ Kinnauri, Kinnaurayanuskad とよばれている．本項では，伝統的呼称を採用したが，いずれは，インドでの慣用に従って，キナウル語とよぶべきであろう．

[分布・方言]　現在，カナウル語の話されている，インド北部，ヒマチャル・プラデシュ(Himachal Pradesh)州のキナウル地方(Kinnaur district)は，東から西へ，ハンラン(Hangrang, Hungrang)・サブタハシル，フー(Poo, Pooh [fuː])・タハシル，モラン(Morang, Moorang)・タハシル，カルパ(Kalpa)・タハシル，ニチャル(Nichar)・タハシルとサンラ(Sangla)・タハシルの，6行政区分からなっている．この地方の77か村(無人村を除く)の村々は，140キロメートルほどにわたって，この地方を分断して流れる，サトラジ(Sutlej, Satlaj, Satluj)川とその支流であるスピティ(Spiti)川，ロパ(Ropa)川やバスパ(Baspa)川などの流域に点在している．

ベイリー(T. G. Bailey 1909, 1911)は，カナウル語を，標準(Standard)カナウル方言，下(Lower)カナウル方言，チトカル(Chhitkal)方言とテボール(Thebor, [*LSI*] Tibarskad)方言の4方言に分けている．一方，シャルマ(D. D. Sharma, 1988)は，サラハン(Sarahan, シムラ Simla 地方)の3キロメートル先からモランまで，すなわち，ニチャル・タハシルと，チトカル村，ラクチャム(Rakchham, ＝ラクシャム Raksham)村の2か村を除く，サンラ，カルパとモランの諸タハシルの大部分，および，フー・タハシルの数か村で話されている言語を，キナウル語または標準キナウル語とし，両者には，音韻構造および形態構造に，いくつかのめだった差異があるが，基本的には1つのグループであると述べ，ベイリーの標準カナウル方言(＝上Upper カナウル方言)と下カナウル方言を区別していないが，カナウル語域の流域ごとに地域的変異が認められる，と述べている．さらに，チトカル語は，モラン・タハシルのネサン(Nesang)村，クノ(Kuno)村，および，チャラン(Charang)村で話されている変種と近い関係にあるとするが，ベイリー(1915)は，「これら2か村の住民は，標準カナウル語を含め，他のカナウル語方言とは非常に異なる方言——あまり異なるので，それは，カナウルの他のどの地方の人々にも理解されない——を話す」と述べている．一方，シャルマは，テボール語について，「このグループの地域は，カナム(Kanam)からフー(いずれも，フー・タハシル)まで，ことに，リッパ(Lippa)，ジャンギ(Jangi)，アスラン(Asrang)，ラバン(Labang, Labrang)，カナム(フー・タハシル)，サンナム(Sunnam, ＝シャンナム Shunnam)，ナムギャ(Namgya, フー・タハシル)とシャソ(Shaso)の諸村である」(1988)と述べ，この言語が，語彙的にも構造的にも，その地域のチベット語方言にもっとも近いとしている．カナウル語をチベット語方言と比較するのは適当でないが，テボール語は，明らかに，カナウル語とは別の言語である(→ヒマラヤ諸語，ヒマラヤ語系)．本項では，標準カナウル方言，下カナウル方言をカナウル語の方言とし，チトカル語は，ベイリーの言葉に基づいて，カナウル語と同じ下位語群の言語ではあるが，別の言語としておく．

標準カナウル方言は，サラハンの3.2キロメートル先(現在のシムラとキナウルの両地方の境界)から，ジャンギ(モラン・タハシル)までのサトラジ川の流域で話されているが，タランダ(Taranda, ニチャル・タハシル)までは，川の南岸でのみ話されている．

下カナウル方言は，タランダまでのサトラジ川の北岸で話されている．この方言は，標準カナウル語とあまり違わないが，コチ語(Kochi, インド語系)の単語(借用語？)をもっとも多く使用するといわれる．

[人　口]　1981年の国勢調査によれば，キナウル地方の全人口は，59,547人となっている．このうち，そのほとんどがインド語系(Indic, インド・ヨーロッパ語系 Indo-European)の言語を話す下層カースト集団(いわゆる指定カースト Scheduled Castes に分類される)は，全人口の10.63パーセントであるので，おそらく，これを除いた残りの53,200人の大部分が，カナウル語かテボール語かチベット語のニャム(カット)方言の話者であると思われる．

1961年の人口調査に基づく母語別人口統計によれば，ヒマチャル・プラデシュ州全体のカナウル語話者は，45,379人で，そのうちの42,515人が，キナウル地方の住民である．キナウル地方のチベット人は522人となっているが，この数字は，土着のニャム(カット)方言の話者をさすのか，近年にチベットから移住したチベット人をさすのか，明らかでない．

一方，ベイリー(1909)は，「キナウル地方は，バシャール(Bashahr)州にあるが，同州は，3,800平方マイルの面積と8万4千の人口がある．カナウル人は，ほぼ2万人を数える」と述べており，この数字をみると，カナウル語話者の比率が4分の1以下であるが，それは，当時，キナウル地方がバシャール藩王国の一部にすぎなかったからであろう．

シャルマ(1988)によれば，このキナウル地方の言語は，チベット・ビルマ語系のチベット語のニャム(カット)方言，および，ヒマラヤ諸語のほかに，インド語系の言語のさまざまな変種(variety)が，下層カースト集団であるハリジャン(Harijan, 不可触民)によって話されているという．この変種は，シムラ地方の同様な下層カースト民のそれに近く，その話者であるハリジャンは下キナウル地方に多く，上キナウル地方，ことに，ロパ(Ropa)，ギャボン(Gyabong)とサンナムのハリジャンは，テボール語か，その地方の上層カースト集団の言語の地方変種(方言)を話す．他方，下キナウル地方では，ハリジャンは，標準カナウル語を上手に話せるが，自分たちの間では，インド語系言語の変種を常用するという．

[系　統]　カナウル語は，シナ・チベット語族，チベット・ビルマ語派の言語で，チベット語と近い関係にあるとされ，シェーファー(R. Shafer, 1966)は，チベット語門(Bodic Division)の西部ヒマラヤ語系(West Himalayish)の北西部(NW)語支に，ベネディクト(P. K. Benedict, 1972)は，チベット・カナウル／チベット・ヒマラヤ中核語群(Tibeto-Kanauri/Bodish-Himalayish nucleus)のヒマラヤ下位中核語群(Himalayish subnuclear group)に分類しており，他の学者も，下位語群の名称が異なる場合があっても，一般に，これに従っている．分類の詳細は，「ヒマラヤ語系」「ヒマラヤ諸語」の項を参照されたい．なお，カナウル語の分布域の西側に位置するヒマチャル・プラデシュ州の西部のクル(Kulu, Kullu)地方の山村，マラナ(Malana, 〔*LSI*〕Malāna)村で話されているカナシュ語(Kanash, 〔*LSI*〕Kanashi, ＝マラニ語〔*LSI*〕Malani)は，その位置関係にもかかわらず，チトカル語と並んで，カナウル語と同じ下位語群の言語と考えられる．

カナウル語は，比較的古くから西欧の学者に注目された言語であり，文法についての簡単な記述や語彙集などが公刊されてきた．特に，ベイリーの文法概略と語彙は，比較研究にもっとも貢献した標準カナウル語資料であったが，彼の表記はきわめて複雑で，しかも，音価の記述にあいまいな点が多いといった問題があった．カナウル語の項を含む『インドの言語調査』(*Linguistic Survey of India*)の第3巻，第1部(略 *LSI*)は，ベイリー(1909)と同年に刊行されており，テキストを除き，音声，文法の概説や語彙は，ベイリーの資料とは異なっている．なお，下カナウル方言とチトカル方言については，*LSI*の記述様式に従ったベイリーの簡単な記述とわずかな語彙が，ベイリー(1915)に収録されている．

その後，1988年に，ようやく，シャルマの『キナウル語記述文法』(*A Descriptive Grammar of Kinnaur*)が出版され，カナウル語についてのベイリーの記述の問題点のいくつかが，明らかになった．シャルマは，カナウル語にとどまらず，ヒマチャル・プラデシュ州およびウッタル・プラデシュ(Uttar Pradesh)州の西北部のほとんどのチベット語方言とチベット・ビルマ語系言語の，音素体系，文法概説，語彙を調査，発表している．しかしながら，その後の調査によれば，いずれも，多くの誤記や誤植が含まれており，あまり信頼できない．また，カナウル語の記述文法も含めて，文法や文法概説は，いずれも肝心な部分が抜けていたり，記述があいまいであったりする．したがって，以下に，シャルマの記述に従って，音韻，文法について解説するが，詳述は避け，概略を述べるにとどめる．

[音　韻]

(記号：[　]内は音声表記を，/　/内は音韻表記を示し，(X)はXが任意的要素であることを示す．なお，/　/は，特に誤解を生じない場合は，省略する．Cは子音を，Vは母音を，#は語境界を表わす)

音節の型は，$((C_1)C_2(C_3))V(:)(C_4(C_5))$で表わされる．最大の音節は，$C_1C_2C_3VC_4$(例：/sgyəl/「路」)か$C_2C_3VC_4C_5$(例：/priŋk/「湿った」)で，最小の音節は，V(例：/i/「1(連体形)」)である．

母音音素は，基本的には，/i, e, ə, a[ɑ], ɔ, o, u/の7種である．ただし，/ɔ/には，/ə, a, u/と対立する例はあるが，/o/と対立する例はない．なお，/ə/と/o/は，予測できる環境で異音[ɔ]をもつとしているが，問題の環境については明示していない．他方，/e/を含む他の母音と対立する例がないだけでなく，/əy/(この場合は，方言的変異のようである)や母音連続/ae/または/ahe/の融合形(例：/səy/～/sɛ/「10」，/lahe/～/lae/～/lɛ/「日」)と解釈できる例を除くと，借用語にしか現われない[ɛ]に対しては，別個の音素とすることを，シャルマは躊躇している．[ɔ]と同様に，[ɛ]も，/e/の異音の1つにあげており，借用語の土着語化した発音では，[ɛ]は，/e/で自由におき換えられるとも述べている．

シャルマは，母音の長さの対立について，「歴史的発達で，たぶん/ə/を除く，すべての母音の長さは，キナウル語で有意的となっている．通常の発音では，すべての母音の音質と持続(長さ)は，それらの前後の音声的環境によって影響を受ける」と述べ，/ə/を除いたすべての母音に，長母音の異音(/_#)を認め，さらに，同一母音連続は長母音(V:)と解釈している．つまり，カナウル語に，音声的長母音と音韻的長母音の2種類が区別されるという意味であろうが，/u:/「花」

のような場合，/u/ [uː] (実例があるかは不明) と，音声的に違いがあるのかどうかは明らかでない．

同様に，鼻音化母音についても，音声的鼻音化母音 (/__ [＋鼻音]) と音韻的鼻音化母音が区別されている (例：/me/「火」，/mẽ/「昨日」)．

なお，母音の長さと鼻音化は，超分節素と解釈されている．

すべての /V_iV_j/ または /V_iV_i/＝/$V_iː$/ は母音連続 (vowel sequence) であり，二重母音はない．

子音音素には，表1の32種(と半母音2種)がある．

〈表 1〉 カナウル語の子音音素

	両唇音	歯音	歯茎音	反舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音							
無声無気	p	t		ṭ		k	
無声有気	ph	th		ṭh		kh	
有声	b	d		ḍ		g	
破擦音							
無声無気			c [ts]		č		
無声有気			ch [tsh]		čh		
有声			j [dz]		ǰ		
摩擦音							
無声			s		š		h
有声			z		ž		
鼻音	m	n		ṇ	ñ	ŋ	
顫え音							
無声			rh				
有声			r				
側面音							
無声			lh				
有声			l				
半母音	w				y		

/ṇ/ と /ñ/ は，語中にしか立ちえず，機能負担量がきわめて低い．この2種の鼻音を除く，すべての子音は，語頭にも語中にも立ちうるが，語末(C_4)には，有気音 (/ph, th, ṭh, kh, ch, čh/)，/ž/，/h/，および，/w/ は立ちえない．

/š/ は，反舌音の前では [ṣ] となる (例：/pišṭiŋ/ [piṣṭiŋ]「背中」)．/r/ の異音としての [ṛ] (弾き音) が，ヒンディー語からの借用語の場合，教育のある人々の発音に現われることがあるという．なお，シャルマは，/š/ と /ž/ を，少し反舌音的な歯茎歯擦音 (slightly retroflex alveolar sibilant) としている．

語末，または，語中の無声音の前では，無声音と有声音の対立は中和され，いずれも，無声音として現われる (ただし，この対立の中和は，閉鎖音の場合に限られるのか，破擦音，摩擦音の場合も含まれるのか，はっきりしない．例：/əg/ [ək]「洞穴」，cf. /əgu/「洞穴の」)．この有声閉鎖音の音価は，ベイリーの説明で，もっともあいまいな点であった．このシャルマの記述は，一部の語にみられる語末有声閉鎖音と無声閉鎖音の交替が，マンチャト語の場合 (→マンチャト語「音韻」の3) と同様に，形態音韻的交替 (morphophonemic alternation) である可能性を示唆しているが，本文中でのシャルマの表記は首尾一貫していない．たとえば，シャルマの記述に従えば，「目」の絶対格形 /mig/ の実現形は [mik] で，属格形 /migəs/ の実現形は [migu] となるはずであり，この場合は，語末の -g は，形態音素(morphophoneme)か，/mig/ 全体が一種の基底表示(underlying representation) と解釈できる (ただし，シャルマの分析は，伝統的な音素論に基づくものであろう)．しかしながら，同じような交替の考えられない形容詞で，/teg/「大きい」と/rək/「黒い」(＝〔ベイリー〕 rŏkh；おそらく，ヒンディー語方言からの借用語，cf. haugan) のように，/-g/ [-k] と /-k/ に異なる表記を与えている．これが，カナウル語に固有な語と借用語が区別されることを意味するのか否かは不明である．この表記上の混乱は，繋詞／助動詞や活用語尾の表記の場合に著しい．たとえば，シャルマの記述では，人称接辞の1人称単数形は /-k/～/-g/ で，繋詞／助動詞 /to/ の1人称単数現在形は /tok/～/tək/～/tog/，1人称単数過去形は /teg/～/tokeg/～/tokek/ となっている．一方，繋詞／助動詞 /du/ の1人称単数現在形は /duk/～/dug/，1人称単数過去形は /duek/ (cf. 3人称単数過去形〔普通体〕/due/～/dug/，3人称複数過去形〔普通体〕/dug/，2人称複数過去形〔敬語体〕/dugič/) である．交替形の一部は，方言形を表わすとされているが，どれが地域方言形で，どれが標準カナウル語内部の交替形か明らかでない (また，この有声音と無声音の交替が形態音韻的な交替であれば，標準カナウル語の交替規則は，方言にも通用する蓋然性も高いと思われる)．しかも，動詞接辞や繋詞／助動詞にみられる交替のすべてが規則的な形態音韻的交替であるとは考えられない (たとえば，表7を参照) ので，本項では，動詞接辞や繋詞／助動詞の末尾閉鎖音は，語末で有声閉鎖音と無声閉鎖音の対立がないことを根拠に，有声閉鎖音をすべて無声閉鎖音で表記した．また，語末の閉鎖音は開放 (release) されない．

語中では，次の音節の頭子音が無気音であれば，有気音は無気音化する傾向がある．

語頭(ないしは音節頭)子音結合には，C_1C_2-，C_2C_3-，$C_1C_2C_3$- の3種がある．C_1 は /s, ž/ に，C_3 は /r, w, y/ に限られる．ただし，語頭子音結合は，サンラ・タハシルやニチャル・タハシルの方言ではよく維

持されているが，標準カナウル方言では，失われていることが多い．

1）C_1C_2-：/sp-, sb-, st-, sṭ-, sk-, sg-; žg-/

2）C_2C_3-：

2-i）C_2r-：/pr-, phr-, br-, tr-, thr-, kr-, khr-/

2-ii）C_2w-：/tw-, thw-, kw-, khw-, gw-, chw-/

2-iii）C_2y-：/py-, phy-, by-, dy-, ky-, khy-, gy-; šy-, hy-; my-, ny-, ñy-; ry-/

3）$C_1C_2C_3$-：/skw-; sky-, sgy-; skl-/

なお，/skl-/ の例は，/skli/「尿」のみで，この語は，ベイリー(1909)では，skölī と記録されている．カナウル語では，介音 *-l- は，一般に失われており，シャルマの表記が正しいとしても，/skl-/ は例外である．

語末（ないしは音節末）子音結合 -C_4C_5 の C_5 は，/ṭ, k, c, s, z/ に限られているようである．下にあげた子音結合ですべてを尽くしているか否かは，確言できない．

4）-C_4C_5：/-nṭ, -šk, -ŋk, -rk, -lk, -kc, -ŋc, -lc, -ms, -ŋs, -rz/

カナウル語の新旧の資料を比較すると，語頭および語末子音結合の数と種類には，方言差によるものにせよ，個人差によるものにせよ，かなりの違いがあるように思われる．

シャルマは，ストレスもピッチも，示差的でないとしている．

シャルマは，母音のわたり音化(例：i→y, e→y, u→w)，順行同化（例：m→n/n__），逆行同化（例：g→k/__š［無声化］；t→d/__d［有声化］），母音削除（例：V→ϕ/__#），母音挿入（例：ϕ→i/C__C）などの，さまざまな形態音韻変化をあげているが，いずれも，規則が十分に形式化されていない．したがって，ここで形態音韻規則をまとめて示さずに，それぞれの例に，必要に応じて形態音韻変化を示すことにする．

シャルマ (1988) には，c/č, ch/čh, ə/a, s/š などの混同や誤植が大変多く，どれが正しい形式か，明らかでない場合が多い．また，/šy/ と /sy/ の場合，語頭には /šy/ のみを，語中では，/šy/ と /sy/ を認めているが，音韻的には，同じものであるかもしれない．さらに，1つの語にいくつかの語形をあげている場合，それが，標準カナウル語での交替形なのか，他の方言形なのか，明らかでないことも多い．このような場合には，ベイリー(1909, 1910, 1911)やジョシ (T. R. Joshi, 1909) の文法概説や語彙も参照してある．

［文　法］

（略語：1/2/3＝1人称/2人称/3人称，単＝単数，複＝複数，現＝現在，過＝過去，未＝未来，分＝分詞，動名＝動名詞，不定＝不定詞；{　}内は，形態素または構造型を示す．X^2 は，X の重複形である）

1）語　順　　カナウル語は，チベット・ビルマ語系言語に典型的な，動詞文末型であり，平叙文では，〔主語-目的語-動詞(述語)(SOV)〕型の言語である．疑問文も，一般疑問文はこの語順に従うが，疑問詞を伴う特殊疑問文の場合，疑問詞は，通常，主動詞の直前におかれるようである．動詞句や名詞句の修飾要素は，いずれも，被修飾要素の前におかれる．さらに，名詞句内部の修飾要素の語順は，〔指示詞／属格代名詞-関係節-数詞-形容詞〕である．主要名詞が2つの形容詞をとる場合，色彩を表わす形容詞が後にくる．

do id gaṭoc suig pyač（その 1 小さい 赤い 鳥）「その1羽の赤い小鳥」

zu aŋ ṭhog raŋ（あれ 私〔単・属格〕白い 馬）「あの私の白い馬」

boṭhoŋ-u deŋ tošiš id gaṭoc pyač（{木-属格 上 座る〔過分〕} 1 小さい 鳥）「木の上に止まった1羽の小鳥」（{　}内は，関係節）

なお，関係節は，現在分詞形または過去分詞形（シャルマの完了分詞形）をとるが，シャルマが関係節とよぶものは，ここでは，照応(ないしは相関)関係節と見なしている．

hətiaŋ bəto, *hədoi* bito.（? 誰でも 来る〔3単・未〕(bə-←bən-) ? それ 行く〔3単・未〕）「誰でも来る人が行く」

2）代名詞化言語　　カナウル語は，すでに，細かい区別は失われているが，基本的には，動詞が主語の人称・数との一致を示す言語である．チベット・ビルマ言語学では，このような動詞の一致現象を，伝統的に，“代名詞化(pronominalization)”とよび，動詞の一致を示す言語を，“代名詞化言語 (pronominalized language)”とよぶ．ヒマラヤ地域のほとんどの言語は，代名詞化言語である(→ヒマラヤ諸語「言語特徴」の4)．この呼称は，これらの言語の人称・数接辞が，歴史的に，人称代名詞の自立形から派生したとされることによるものである．しかし，個々の言語，下位語群で，人称代名詞または人称接辞は，改新 (innovation) や水平化 (levelling) などの結果，現在は，それぞれの来源が異なる例が多い．その上，音韻変化によって，同定さえ困難な例もある．さらに，カナウル語の場合のように，おそらく，テンス・アスペクト接辞と融合した結果，人称接辞体系が，テンス・アスペクト体系と交叉している例も多い．なお，ヒマラヤ語系では例外であるが，カナウル語の動詞には，主語だけでなく，目的語の人称との一致を示す，2種の接尾

辞 {-č} “1人称/2人称” と {-t} “3人称” があり，動詞語根に，直接，付加される．この一致は任意的のようであり，目的語が “人間”（または “有生”?）の場合に限られるようである．したがって，3項動詞の場合には，動詞は，間接目的語の人称と一致する．{-č} には，/-č/～/-či/ の交替形があるが，/-či/ は /d/ の前に現われ，それ以外の環境では，/-č/ が現われるようである．

gə ke-č-ok.（私〔単・絶対格〕与える-2-1単・未 «普通体»）「私はあなたにあげるだろう」

dos khya-či-t.（それ〔単・能格〕見る-1/2-3単・過 «普通体»）「彼は私／あなたを見た」

kə khya-t-on.（あなた〔単・絶対格〕見る-3-2単・未 «普通体»）「あなたは彼を見るだろう」

3）能格と絶対格　カナウル語は，従来，分裂能格言語とされてきたが，能格の用法（下述）については，まだ，はっきりしない点が多い（能格の用例は，以下の例文を参照されたい）．能格と絶対格の現われ方についての記述は，あいまいである．

ベイリー(1909)は，動作主格〔能格〕について，次のように述べている．

「一般的な規則では，自動詞に関しては，それ〔動作主格〕は使用されない．他動詞に関しては，他動詞の主語である名詞は，すべてのテンスにおいて，動作主格である．1人称と2人称の代名詞は，主格〔絶対格〕である．3人称の代名詞は，過去では動作主格であるが，それ以外では主格である．この規則は，厳密に守られず，1人称や2人称の人称代名詞に，動作主格がみられる」

従来，このベイリーの記述に基づいて，（標準）カナウル語は分裂能格型の言語とされた．

シャルマ(1988)は，自動詞の主語は，すべてのテンスで直格（direct case）〔絶対格〕であり，すべての他動詞の主語は，過去では能格であるとする．その一方で，「2つの目的語をもつもの以外の，すべての他動詞における一般的規則として，主語は，常に，動作主格つまり能格であり，目的語は，人間でも非人間でも，直格（主格）である．しかし，この規則は，1人称と2人称の代名詞の主語に関しては，厳密に守られていない」とも述べている．また，二重目的語をとる場合，主語は能格，間接目的語は与格で，直接目的語は直格〔絶対格〕をとるという．

しかし，下にあげた例文の能格の用例をみると，このシャルマの記述からはずれる例が認められる．また，いわゆる直接目的語でも，人間であれば，与格（シャルマの対格・与格）をとるのが，むしろ，普通のようである．したがって，能格の使用については，例外もあるが，たしかに，テンス，品詞の種類（名詞／代名詞），人称などによる制約があるようであり，能格標識の現われ方のみを問題にする場合にのみ，カナウル語は分裂能格言語であるとも言えよう．しかし，カナウル語を含む，多くのチベット・ビルマ語系言語では，直接目的語と間接目的語が，その意味素性や語用論的特性によって，同じ格標識をとる（その場合，その意味素性には，“+有生” や “+人間” が含まれるのが普通であり，これらの素性は，間接目的語に特徴的であると考えられるので，ここでも，問題の格標識を与格標識とよぶ）．したがって，チベット・ビルマ諸語の類型論では，能格標識の現われ方に基づいて，能格型，分裂能格型，対格型などをうんぬんするのは，おそらく，あまり意味がないであろう．

カナウル語では，2人称と3人称の代名詞，および，（主語一致の）動詞人称接辞によって，“普通体” と “敬語体” の2種のスタイルが区別される（以下の例では，代名詞と人称接辞のおのおのにはこの区別を標示せず，文全体に標示してある）．

4）文の種類　次に，平叙文（単文，複文，重文）と特殊疑問文の例をあげておく．

（1）zu aŋ kim to.（これ〔単・絶対格〕私の〔単・属格〕家〔絶対格〕繋詞$_2$〔3単・現〕）«普通体»「これは私の家です」

（2）aŋ sum riŋz-a toč.（私の〔単・属格〕3 姉妹-複 繋詞$_2$〔3複・現〕）«普通体»「私には3人の姉妹がいる」

（3）gə tero kim-o beo duk.（私〔単・絶対格〕今日 家-於格 行く〔現分〕繋詞$_1$〔1単・現〕）「私は今日家へ帰る」（be-←bi-）

（4）boṭhaŋan-oč pathrəŋ-a dac.（木-奪格〔於格+奪格〕葉-複 落ちる〔現〕）«普通体»「木から葉が落ちる」

（5）yuṭhəŋ rim thuk rim-oč teg to.（下 畑 上 畑-奪格〔於格+奪格〕大きい 繋詞$_2$〔3単・現〕）「下の畑は上の畑よりも大きい」

（6）mazəŋsya rim zonu teg du.（中 畑 もっとも 大きい 繋詞$_2$〔3・現〕）「真ん中の畑がいちばん大きい」

（7）do kaməŋ lanc du.（彼〔単・絶対格〕仕事〔絶対格〕する〔現〕繋詞$_1$〔3単・現〕）«普通体»「彼は仕事をする／している」

（8）gəs aŋ bapu-pəŋ čiṭṭhi čemu duk.（私〔単・能格〕私の〔単・属格〕おじ-与格 手紙〔絶対格〕書く〔動名〕+繋詞$_1$〔1単・現〕“義務”）「私はおじへ手紙を書かなくてはならない」

（9）dogos aŋu i kitab ranəš.（彼ら〔複・能格〕私〔単・与格〕1 書物〔絶対格〕与える〔3複・過〕）«普通体»「彼らは私に本を1冊くれた」

(10) ama-s anu čhaŋ-u bikhari-pəŋ rano. (母–能格 自分の〔単・属格〕息子–与格 乞食–与格 与える〔3単・過〕) «普通体»「母親は自分の息子を乞食にやった」

(11) ama čhaŋ-u kherəŋ stuŋc. (母〔単・絶対格〕息子–与格 乳〔絶対格〕飲ます〔現〕)「母親は子供に乳を飲ませる」(stuŋ-「飲ませる」← tuŋ-「飲む」)

(12) ṭhurennu hənto. (走る〔動名〕できる〔3単・未〕) «敬語体»「(彼は)走ることができるだろう」

(13) aŋu khyam gyac. (私〔単・与格〕見る〔動名〕+欲する"義務"〔現〕)「私は見るべきだ」(-m ← -mu)〔この構文では，主語は，与格をとるようである〕

(14) tuŋmu gya gya to. (飲む〔動名〕+欲する"願望"〔過分〕[2] 繋詞$_2$〔3単・現〕)「彼が飲みたがっている」

(15) do hət due. (彼〔単・絶対格〕誰〔単・絶対格〕繋詞$_1$〔3単・過〕) «普通体»「彼は誰だったのか」

(16) ki dilli-č aŋuŋ thə kañi. (あなた〔単・絶対格〕デリー–奪格 私〔単・属格+"〜のために(受益)"〕なに〔絶対格〕持って来る〔2単・過〕) «敬語体»「あなたはデリーから私になにを持って来てくださいましたか」(aŋuŋ ← aŋu + uŋ, ka- ← kan-)

(17) gəs hətu lok. (私〔単・能格〕誰に〔単・与格〕言う〔1単・過〕)「私は誰へ言ったのか」(lo- ← lon-)

(18) kis gas-a həm ta ta dueñ. (あなた〔単・能格〕衣類–複 どこに 置く〔接分〕[2] 繋詞$_1$〔2単・過〕) «敬語体»「あなたは衣類をどこに置かれたのですか」

(19) dopəŋ bi bi tetra dyar hačis. (彼〔単・与格〕行く〔過分〕[2] いくつ 日 なる〔3単・過〕)「彼が行って何日になったか」(dopəŋ が与格をとる理由は不明である)

(20) gəs bio bio khyak. (私〔単・能格〕行く〔現分〕[2] 見る〔1単・過〕)「私は歩きながら見た」

(21) do kim-u saṇəŋ še še bio du. (それ〔単・絶対格〕家–属格 錠+送る=錠をする〔接分〕[2] 行く〔現分〕繋詞$_1$〔3・現〕) «普通体»「彼は家の戸締まりをして出かけている」(še- ← šen-)

(22) kə zu kaməŋ lan-ma, gə kənu pesa kek. (あなた〔単・絶対格〕これ 仕事〔絶対格〕する–"条件" 私〔単・絶対格〕あなたに〔単・与格〕お金〔絶対格〕与える〔1単・過〕)「お前がこの仕事をしたら，私はお前に金をやった(だろう)」

(23) ki bən-na, aŋu le bənnu pəto. (あなた〔単・絶対格〕来る–動詞接辞"条件" «敬語体» 私に〔単・与格〕も 来る〔動名〕+pa-(助動詞)"強制"〔3・未〕)「あなたが来られるなら，私も来なくてはならないだろう」(pə- ← pa-)(この構文では，主語は，与格をとるようである)

シャルマは，名詞，代名詞，数詞，形容詞，動詞，付加詞 (adjunct, 副詞)，小詞の7種の品詞を立て，名詞，代名詞は実詞類 (substantive) に，数詞は形容詞類に分類し，さらに，形容詞と付加詞は修飾詞 (modifier)に分類している．

5) 名 詞　名詞の複数形は，語幹に接尾辞 /-ga〜-go(母音語幹)〜-a(子音語幹)〜-(V): (後舌円唇母音語幹)/ を付加してつくられるが，複数の表示は任意的であり，/ti/「水」，/yume/「太陽」，/čhwa/「穀粒」などの一部の非可算名詞や，数詞で修飾された名詞は，通常，複数形をとらない．文中における名詞句の統語関係は，助詞類，特に，格助詞，語順などによって示される．格標識(格助詞)には，

a) 能格：/-əs〜-is(子音語幹)〜-s(母音語幹)/
b) 絶対格：/-φ(ゼロ)/
c) 与格：/-pəŋ(母音語幹)〜-u(子音語幹)，-nu(複数語幹)/
d) 具格=能格
e) 奪格：{属格形(無生，有生)+/-kč/,/-dwakč/}，{於格形+/-č/}
f) 属格：/-u〜-φ(/[V,+円唇]_)/
g) 於格：/-o, -no(複数語幹)/

などがある(ベイリーは，奪格標識を /-č/ ではなく，/-c/ としている．なお，č- 系列と c- 系列の弁別は，あまりはっきりしないが，これが方言差なのか個人差なのか明らかでない)．

次に，名詞の活用例をあげるが，名詞は，有生名詞か無生名詞かで，とりうる格接尾辞に制約がみられる(表2を参照)．また，上述のように，非可算名詞には，複数形はない．

6) 代名詞　代名詞は，人称代名詞，指示代名詞，疑問代名詞，再帰代名詞などに分類される．いずれも，名詞と同様に，数接尾辞，格接尾辞をとるが，名詞のそれと異なる，独自の交替形をとる例がみられる．また，単数，複数のほかに，双数が区別される．

人称代名詞(表3を参照)では，1人称単数形 /gə/〜/aŋ/ の語幹の交替形が置換形で，双数と複数に，それぞれ，排除形と包括形があり，2人称代名詞には，親称形と敬称形がある．3人称代名詞には，指示代名詞を用いるが，複数形は，単数形の敬称形としても使用される．

指示代名詞 (表4を参照) には，近称 (zu, həzu「これ；この」)，遠称〔可視域内〕(nu, hənu「それ；

〈表 2〉 カナウル語の名詞の活用

《有生名詞》

		子音語幹 /rəŋ/「馬」	母音語幹 /mi/「人」
能格	単	raŋəs	mis
	複	raŋas	migas
絶対格	単	rəŋ	mi
	複	raŋa	miga
与格	単	raŋu	mipəŋ
	複	raŋanu	miganu
奪格	単	raŋudwakč	miudwakč
	複	raŋanudwakč	miganudwakč
属格	単	raŋu	miu
	複	raŋanu	miganu

《無生名詞(複数形欠如)》

	子音語幹 /golchəŋ/ ～/golsaŋ/「月」	母音語幹 /ti/「水」
能格	golchaŋəs	tis
絶対格	golchaŋ	ti
与格	golchaŋu	tiu
奪格	golchaŋoč	tiudwakč
属格	golchaŋu	tiu
於格	——	tio

その」) と最遠称〔可視域外〕(do, hədo「あれ；あの」) が区別されている．なお，遠称形と最遠称形は，語幹の形式が異なるだけであるので，3人称代名詞としても多く使用される，最遠称形の活用のみを示す．

シャルマは，cəiki「みな (人間)」，cəi「すべて (非人間)」，cəiko「誰でも」，ide「いくつか」などを，

〈表 4〉 カナウル語の指示代名詞の活用

《近　称》

	単　数	双　数	複　数
能格	zus	zunišis	zugos
絶対格	zu, həzu	zuniš	zugo
与格	zupəŋ	zunišu	zugonu
奪格	zu-dəŋč	zunišu-dəŋč	zugonu-dəŋč
属格	zu:	zunišu:	zugonu:
於格	zor	zonišo	zogono

《最遠称》

	単　数	双　数	複　数
能格	dos	donišis	dogos
絶対格	do, hədɔ	dogsuŋ	dogo
与格	dopəŋ	donišu	dogonu
奪格	do-dəŋč	donišu-dəŋč	dogonu-dəŋč
属格	do:	donišu:	dogonu:
於格	dor	donišo	dogono

不定指示代名詞としてあげるが，いずれも，数詞とともに，数量詞とでも分類される語であろう．

疑問代名詞には，hət「どれ，誰」とthəd (単数形) ～cəd「なに」がある．前者と異なり，後者には，能格形がないが，於格形 (単数のみ：thədo) がある点を除けば，両代名詞の活用は平行的であるので，表5にhət の活用のみを示す．両代名詞とも属格形があるはずであるが，シャルマはあげていない．おそらく，人称代名詞と平行的に (hətu:, hətesuŋu:, hətenu:) 活用するものと思われる．

疑問形容詞と疑問副詞には，həmšya「どの (男

〈表 3〉 カナウル語の人称代名詞の活用

《1人称》

	〔単　数〕	〔双　数〕 排　除	〔双　数〕 包　括	〔複　数〕 排　除	〔複　数〕 包　括
能格	gəs	nišis	kasaŋəs	niŋos	kasaŋas
絶対格	gə	niši	kasaŋ	niŋa	kasaŋa
与格	aŋu	nišu	kasaŋu	niŋanu	kasaŋanu
奪格	aŋ-dwakč	nišu-dwakč	kasaŋu-dwakč	niŋanu-dwakč	kasaŋanu-dwakč
属格	aŋ	nišu	kasaŋu	niŋonu	kasaŋanu

《2人称》

	〔単　数〕 親　称	〔単　数〕 敬　称	〔双　数〕 親　称	〔双　数〕 敬　称	〔複　数〕 親　称	〔複　数〕 敬　称
能格	kəs	kis	kənišəs	kišis	kənegas	kinas
絶対格	kə	ki	kəniš	kiši	kəniga	kina
与格	kənu	kinu	kənišu	kišu	kəneganu	kinanu
奪格	kənu-dwač	kanu-dwač	kənišu-dwač	kišu-dwač	kənanu-dwač	kinanu-dwač
属格	kən	kin	kənišu	kišu	kəneganu	kinanu

〈表 5〉 カナウル語の疑問代名詞の活用

(例：hət)

	単 数	双 数	複 数
能 格	hət	hətesuŋ	həte
絶対格	hətəs	hətesuŋəs	hətes
与 格	hətu～hətpəŋ	hətesuŋu	hətenu
奪 格	hətu	hətesuŋu	hətenu

性)」, həmše「どの (女性)」, həm「どこに」, həmč「どこから」, hə̄la「どのように」; tetra「いくつ, どれだけ」, terəŋ「いつ」などがある. いずれも, 疑問代名詞の語幹か孤立語幹 /te-/ に, 派生接尾辞 (と格助詞) が付加された形式であるか, 元来その形式であったものと思われる.

再帰代名詞は, 1人称単数形 (gə:i) および3人称形 (単数／複数 anisi) 以外は, いずれも, {人称代名詞属格形＋/-i/＋/-si/} の形式である. なお, 別個の双数形はなく, anegesuŋ「互いに」を使用する.

7) 数 詞　数詞は, ネパールのチベット・ビルマ語系言語では, マナン語, タカリ語などの一部を除けば, その多くが, せいぜい10位までしか, 固有の形式は残されておらず, 他は, ネパール語からの借用語でおき換えられているが, カナウル語をはじめ, ヒマラヤ語系の諸言語は, 100位まで, 形式がよく残されている. カナウル語では, 1,000 (həzar, cf. ヒンディー語 hazār) 以上の数詞を使用することはまれである. 必要な場合は, アーリア (インド) 語系 (lakh「1万」, karor「10万」) か, チベット語系 (staŋ, ṭhi) の借用語を使用する. 数詞は, 「1」から「10」までの指数と, 「100」, 「1,000」を基本数詞とし, その他の数詞は, 漢語系の日本語の数詞と同様に, この基本数詞およびその結合形を組み合わせてつくられる. なお, 部分的ではあるが, 「30」, 「40」, …, 「90」などの造語法に20進法が認められる点は, 一部のヒマラヤ地域の言語と共通しているが, 20に特別な形式はない (自立形は, 下線で示してある).

《基本数詞》 「1」id, i-, -hid, 「2」niš, ni-, 「3」sum, -rum, 「4」pə:, pə-, 「5」ŋa, 「6」ṭuk, -ruk, 「7」štiš, 「8」rəy, 「9」sgui, sgu, 「10」səy, si-, so～zo, sa～za, sə, si, 「100」ra

《その他》 「11」sihid, 「12」soniš, 「13」sorum, 「14」sapə:, 「17」səštiš, 「20」niza, 「26」nizoṭuk, 「27」nizoštiš, 「30」nizo-səy ({20–10}), 「31」nizosihid, 「33」nizosorum, 「40」niš-niza ({2–20}), 「50」niš-nizo-səy ({2–20–10}), 「60」sum-niza ({3–20}), 「70」sum-niza-səy ({3–20–10}), 「80」pə-niza ({4–20}), 「90」pə-niza-səy ({4–20–10})

なお, 基本数詞では, 無声・有声の交替や /ṭ/～/r/ の交替に, ある程度の規則性が認められるが, 上例からも明らかなように, 一般的な形態音韻規則を立てることはできない.

序数詞は, omšya「第1」, aišya「第2」, sumšya「第3」以外は, 基数詞をそのまま使用する.

8) 形容詞　カナウル語の本来の形容詞 (例：teg「大きい」, raŋk「高い」, dam「よい」, ñug「新しい」, kag「苦い」, lis「寒い」, rag「緑の」) は, 比較的, 数が限られているようであるが, このほかに, 形容詞的機能をもつものとして, 現在分詞 (例：yab-o「飛んでいる」＜yab-), 過去分詞 (例：ši-šit「死んだ」＜ši-, ci-šit「洗った」＜ci-) を含む出動形容詞や, その他の派生接尾辞による出名形容詞 (例：kra-šya「毛深い」＜kra「(頭) 毛」, cha-si「塩味の」＜cha「塩」; tiskər-əs「渇いた」＜tiskər「渇き」〔ti「水」＋skər-「渇く」〕) などがある.

なお, これらの派生形容詞のみならず, 本来の形容詞も, 名詞的機能をもっており, 逆に, 動名詞には, 形容詞的機能もある. このように, 形容詞と名詞の境界が明瞭でないのは, チベット・ビルマ諸語に広くみられる特徴と思われる. なお, シャルマは, 上例中の kra-šya の /-šya/ (～/-zya/) を, 派生名詞の項では, 名詞のみならず動詞にも付加されて, 動作主名詞 (agent noun) (例：lən-šya「する人」＜lən-「する」, dešəŋ-šya「村人」＜dešəŋ「村」) をつくる派生接尾辞と規定している. ベイリーは, この接尾辞による派生動詞を, 動作主分詞 (agentive participle) とよんでいる.

シャルマの動詞の分析は, ほぼ, ベイリー(1909)に従っているようである.

9) 動 詞　動詞は, 自動詞と他動詞に分けられるが, チベット・ビルマ語系に広く認められる, 語根の初頭子音の有声・無声の対立による, 自動詞 (有声音)・他動詞 (無声音) の区別が残されている動詞語根はわずかである.

自動詞	他動詞
bər-「燃える」	pər-「燃やす」
bra-「広がる」	pra-「広げる」
bəš-「割れる, 砕ける」	pəš-「割る, 砕く」
don-「出る」	ton-「出す」
doŋ-「開く」	toŋ-「開ける」

同様に, わずかではあるが, 自動詞あるいは他動詞が, 古い接頭辞 /s-/ によって使役動詞となっている例がみられる. この形態論的過程も, すでに, 非生産的な過程である. 現在の生産的な使役動詞は, {動名詞形＋/šen-/「送る」} の複合動詞の形式をとる.

ama čhaŋanu kherəŋ stuŋc.（母〔単・絶対格〕子供たち〔複・与格〕乳〔絶対格〕飲ませる〔現〕）「母が子供たちに乳を飲ませる」

do tošim šeto.（彼〔単・絶対格〕座る〔動名〕送る〔3単・未〕"使役"）「彼を座らせる」（še- ← šen-）

定形動詞｛語幹＋テンス接辞（＋人称・数接辞）｝には，現在，過去，未来の3つのテンスと主語の人称・数による変化がみられる（表6を参照）．それぞれのテンス形には，単純形と複合形があり，"現在"および"過去"の単純形には，いずれも，人称・数による変化がない．複合形（迂言形）は，動詞の分詞形に2種の繋詞のいずれかを加えてつくられるが，その際，繋詞は，テンスおよび主語の人称・数によって活用する．上述のように，シャルマは，さらに2種の目的語一致の動詞人称接尾辞 /-č/"1人称/2人称"と /-t/"3人称"をあげている．

〈表6〉　カナウル語の人称・数接辞

		単数	双数	複数
1人称	包括形	-k	-iñ～-e	-ñ～-e
	排除形	—	-č	-č
2人称	普通体	-n	—	—
	敬語体	-ñ	-č	-č
3人称	普通体	-φ～-t	—	—
	敬語体	-š	-š	-š

繋詞は，動詞の複合形で助動詞として用いられるとき，通常，/to/ が1・2人称と3人称（敬語体）および有生主語の場合に，/du/ が3人称（普通体）および非有生主語の場合に使用される．この2つの繋詞は，表7のように活用するが，いずれにも未来形はなく，繋詞$_3$ /ni/ の未来形で代用される．

動詞の現在形には，次の諸形式があるが，用法に差異があるか否かは述べられていない．

a）単純現在形　語幹に，/-c/～/-t/(/{ši, či}_)を付加してつくられるが，人称・数による活用はない．

zac「食べる，食べている」，wəc「笑う，笑っている」（wə- ← wən-），tošit「座る，座っている」

b）複合現在形には，次の2種がある．

i）現在分詞形に，助動詞 /to/ または /du/ の活用形を付加してつくられる形式．

bio tok「私は行く，私は行きつつある」

ii）単純現在形に，助動詞 /du/ の活用形を付加してつくられる形式．

yabc du「(鳥が)飛ぶ，飛んでいる」

動詞の過去形には，次の諸形式がある．

a）単純過去形には，次の2種類があるが，iは，話し手が直接観察した事象であることを，iiは，伝聞によってのみ知る事象であることを示すという．iiは，一般に，遠過去の事象をさす．

i）動詞語幹に，表8のテンス／人称・数接辞，または，そのいずれとも自由に交替する不変化接辞

〈表7〉　カナウル語の繋詞の活用

繋詞$_1$ /du/

人称	現在形〔普通体〕単数	双数	複数	〔敬語体〕単数	双数	複数	過去形〔普通体〕単数	双数	複数	〔敬語体〕単数	双数	複数
1 排除	duk	duč	duč	—	—	—	duek	dueč	dueč	—	—	—
包括		—	duč	—	—	—						
2	dun	duč	duč	duñ	duñ	duñ	duen	dueč	dueč	dueñ		dugič
3	du	du	du	duš	duš	duš	due～duk	due	duk	dueš	dueš	dueš

繋詞$_2$ /to/

人称	現在形〔普通体〕単数	双数	複数	〔敬語体〕単数	双数	複数	過去形〔普通体〕単数	双数	複数	〔敬語体〕単数	双数	複数
1 排除	tok～tək	toč	toč	—	—	—	tek～tokek	teč～tokeč	teč～tokeč	—	—	—
包括	—	toč	tič	—	—	—	—	toke	toke	—	—	—
2	ton	toč	toč	tiñ	toñ～tiñ	tiñ	ten～token	teš～tokeč	ten～tokeč	teñ～tokeñ	teñ～tokeñ	teñ～tokeñ
3	to	toč	toč	toš	toš	toš	toš～toke	toč～toke	teš～toke	teš～tokeš	teš～tokeš	teš～tokeš

〈表 8〉 カナウル語の単純過去形人称・数接辞

	〔普通体〕 単数	〔普通体〕 複数	〔敬語体〕 単数	〔敬語体〕 複数
1人称	-k	-č	—	—
2人称	-n	-č	-ñ	-č
3人称	-o～-a～-s～-e～-t～-da	-š	-š	-š

/šit/ を付加してつくられる形式.

普通体の3人称単数形の異形態は，それぞれ，次のような条件で現われる.

①-o/{[V, +前舌], ŋ}__, ②-a/C__, ③-s/{či, ši}__, ④-e/{či, ši}__(③と自由変異), ⑤-t/a__, ⑥-da/n__

lok「私が言った」, zat「彼が食べた」; išit「尋ねた」

ii）動詞語幹に，不変化接辞 /gyo/ を付加してつくられる形式.

či-gyo「洗った」

b）複合過去形には，次の2種類がある. iは，不定過去で，iiは，過去における動作の継続を示す.

i）接続分詞に，助動詞 /du/ または /to/ の過去形を付加してつくられる形式.

žəŋ bənnu gya gya due. (ここ 来る〔動名〕欲する〔接分〕[2] 繋詞[1]〔3単・過〕)「彼はここへ来たがった」

ii）現在分詞に，助動詞 /du/ または /to/ の過去形を付加してつくられる形式.

tuŋo due「彼は飲んでいた」

未来形は，単純未来形と複合未来形があるが，複合未来形は，未来時における動作の継続を示す.

a）単純未来形　動詞の語根に，表9の接尾辞①または②を付加してつくられる. ②は，/-či/～/-ši/に終わる動詞語幹に付加される. その際，動詞語幹末の /i/ は消去される.

bitok「私が行くだろう」, hušok「私が学ぶだろう」

なお，これらの接尾辞は，テンス接辞，人称・数接辞などに分析することが可能である.

b）複合未来形　現在分詞形に，助動詞の未来形 /nito/ を加えてつくる.

tuŋo nito「彼は飲んでいるだろう」

動詞の否定形は，その意味が否定される動詞の前に，否定辞 mə- を付加する（例：məkeo「彼は与えないだろう」). 否定の未来形は，məza「彼は食べないだろう」(cf. zato「彼は食べるだろう」), məkek「私は与えないだろう」(cf. ketok「私は与えるだろう」) のように，いずれも縮約される.

〈表 9〉 カナウル語の単純未来形接尾辞

《未来接尾辞①》

	〔普通体〕 単数	双数	複数	〔敬語体〕 単数	双数	複数
1排	-tok	-toč		—	—	—
包	—	-te～-tič	-te～-tič	—	—	—
2	-ton～-tən	-toč	-toč	-tiñ	-tič	-tič
3	-to	-to	-to	-tiš	-tiš	-tiš

《未来接尾辞②》

	〔普通体〕 単数	双数	複数	〔敬語体〕 単数	双数	複数
1排	-ok	-oč	-oč	—	—	—
包	—	-ič	-ič	—	—	—
2	-on～-ən	-oč	-oč	-iñ	-ič	-ič
3	-o	-o	-o	-iš	-iš	-iš

疑問法は，一般疑問の場合には，文末動詞，助動詞（繋詞を含む)に，疑問助詞 /-a/～/-ya/（非円唇母音の後)～/-wa/（円唇母音の後）が付加される. なお，特殊疑問は，上述のように，疑問詞で表示される.

khyan-a「あなたは見たか」

bəda-ya「彼は来たか」(bə- ← bən-)

keto-wa「彼は与えるだろうか」

命令法は，いずれも，動詞語根に接尾辞を付加して標示され，普通体と敬語体が区別される.

a）普通体

単数：/-o/(非高母音の後)～/-u/(高母音の後)～/-φ/(/C__)

複数：/-č/(/V__)～/-ič/(/C__)

b）敬語体：/-ñ/(/V__)～/-iñ/(/C__)

čeo「書け」, byu「行け」(y ← i), no: (o: ← oo), thəs「聞け」, khyač「お前たち，見ろ」, tošiñ《敬語体》「お座りください」

否定の命令形（“禁止”）は，動詞語根に接頭辞 /thə-/ を加えてつくられる.

thəlan「するな！」

非定形動詞 (non-finite verb) は，いずれも，語根に接尾辞を付加してつくられる. 動詞の非定形の種類とその接尾辞は，次のとおりである.

a）不定詞：-mik～-nik(/n__)（例：thəsmik「聞く」)

b）動名詞

i）-im, -am(/C__)～-m(/V__)(例：yunim「歩くこと」)

ii）語根+-mu～-nu(/n__)（例：krabmu「泣

くこと」, lannu「すること」)

シャルマは, i の動名詞形を, 例文中にしか示しておらず, 不定詞の1種としているようである. ベイリーによれば, i は, "可能" (文例12), "願望" (文例14) などの "法性" 動詞と複合的に使用される場合に, ii は, 特に, 主格(=絶対格)の場合に使用されると記しているが, シャルマの用例中では, 両者は区別されていない. 次に, i の例を追加しておく.

kin-dwakč yunim mə-həniň. (あなたの〔単・属〕-奪格 歩く〔動名〕否定-できる〔2単・未〕) ≪敬語体≫「あなたはお歩きになれないでしょう」(動作主は, 奪格で標示されることがあるが, シャルマは, それに受動的意味があるとしている)

c) 分 詞

i) 現在分詞: -o, -do (/n_) (例: šio「死ぬ」, wədo「笑う, 笑いながら」〔wə-←wən-〕)

ii) 過去分詞/受動分詞: 語根+-šit〜-š (/{ši, či}+_)

chəršit「乾かした, 乾かされた」

rešit「売った, 売られた」(re-←ren-)

hušiš「読んだ, 読まれた」

iii) 接続分詞: ① 語根[2], ② -s(/{ši, či}+_)

tuŋ tuŋ「飲んで(飲み終わって)」

yočis「遊んで(遊び終わって)」

分詞形が他の動詞を修飾する場合, 現在分詞は "同時動作" を, 接続分詞は "継起" を表わす.

zao zao bio. (食べる〔現分〕[2] 行く〔3単・過〕) ≪普通体≫「彼は食べながら行った」

hasəl hɔǰəŋ bə bə tošiň. (速く ここに 来る〔接分〕[2] 座る〔命令〕) ≪敬語体≫「速くここへ来てお座りなさい」

10) 副 詞 副詞は, "時間" (例: səda「いつも」, huna「今」), "空間" (例: oms「下に」, thwa「上に」), "様態" (例: zəbna「突然」, suruči「静かに」), "推量" (例: halam「たぶん」), "数量, 程度" (例: gɔzəb「非常に, たくさん(の)」, goṭoda「少し(の)」), "否定" (例: teraŋ「決して〜ない」) を表わす副詞などに分類されている. 副詞には, 代名詞語幹に接尾辞を付加した派生形が多く含まれる.

hɔjəŋ「ここに」, hɔdəŋ「そこに」, hɔnəŋ「あそこに」; hɔza「これだけ」, hɔda「それだけ」; hɔje「このように」, hɔde〜hɔdes「そのように」

そのほかにも, さまざまな派生副詞がある.

ijəb「1回」(i「1」), ñumsko「後の方へ」(ñums「後」), cutkaŋs「静かに」(cutkaŋ「静かな」)

数量・程度副詞には, 同時に形容詞として使用されるものが多い.

11) 助詞類 助詞類は, 否定辞と "選択" の接続助詞などを除けば, いずれも, 接尾辞あるいは前接語 (proclitic)であるが, シャルマは, 両者をはっきりと区別していない. 格助詞, 否定助詞, 疑問助詞 (いずれも, 上述) 以外にも,

a) 接続助詞: -rəŋ〜-ŋ「〜て, 〜と」, ai「〜と」, -ma〜-na (/n_)「〜ならば」, koe...koe「〜か〜か」, me...me「〜も〜も〜ない」,

b) 強調助詞: le「〜も」, -i「〜だけ, 〜も」, tə〜ta「きっと」,

などがある.

[参考文献]

Bailey, T. G. (1909), "A Brief Grammar of the Kanauri Language", *Zeitschrift der Deutchen Morgenländischen Gesellschaft* 63 (Wiesbaden)

——— (1910), "Kanauri Vocabulary in Two Parts: English-Kanauri and Kanauri-English", *Journal of the Royal Asiatic Society* 〔以下, *JRAS*〕 (London)

——— (1911), "Kanauri Vocabulary in Two Parts: English-Kanauri and Kanauri-English", *JRAS*

——— (1915), *Linguistic Studies from the Himalayas* (RAS Monograph 18, RAS, London; repr. 1975, Asian Publication, New Delhi)

Benedict, P.K. (1972), *Sino-Tibetan: A Conspectus* (Cambridge University Press, Cambridge)

Joshi, T. R. (1909), "A Grammar and Dictionary of Kanāwari", *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, (n.s.) 5, Extra No. 2 (Calcutta)

西義郎 (1990),「ヒマラヤ諸語の分布と分類(上)」『国立民族学博物館研究報告』15(1) (大阪)

——— (1991),「ヒマラヤ諸語の分布と分類(中)」『国立民族学博物館研究報告』16(1)

Shafer, R. (1966), *An Introduction to Sino-Tibetan*, Vol. 1 (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

——— (1967), *An Introduction to Sino-Tibetan*, Vol. 2 (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

Sharma, D. D. (1988), *A Descriptive Grammar of Kinnaur* (Studies in Tibeto-Himalayan Languages 1, Mittal Publications, Delhi)

[参 照] ヒマラヤ語系, ヒマラヤ諸語

(西 義郎)

カニンガラ語 gongar kobót, 英 Kaningara

[名 称] 自称の gongar kobót は, 現在では